



# FACE DUO

VRによる  
体験型啓発との  
出会いが、  
市民の理解を進める



社会福祉法人安城市  
社会福祉協議会

## 認知症啓発の壁 - 「言葉だけでシャッターが下りてしまう」

近年、安城市でも認知症は大きな地域課題として顕在化していました。しかし、同市が直面してきたのは「認知症」という言葉を出した瞬間に住民が距離を置いてしまうという現実。

**「私は関係ないから」「認知症じゃないから結構です」**

そんな反応が住民から返ってくることも少なくありません。

既存の講演型の啓発は、どうしても積極的な参加者に偏り、一般の住民層には届きにくかった。こうした課題意識から、「誰もが参加しやすい新しい啓発手法」を模索していました。



## FACEDUO導入のきっかけ - 体験型の啓発コンテンツ

そんな中、大塚製薬との連携を深めていた社協に対し、同社から提案されたのがVRを活用した認知症ケア理解を支援するツール「FACEDUO (フェイスデュオ)」でした。(杉浦氏)

自身も体験する中ですぐに、これが住民の意識を変える可能性を秘めた**“体験型の啓発コンテンツ”**であると直感。VR体験はこれまでの講話中心の啓発とは全く異なるアプローチだと確信できました。

- 「とりあえずやってみよう」という興味で住民が集まる
- 「認知症」という言葉を出さずに自然な導線で参加してもらえる
- 10分程度の映像でも集中して視聴でき、理解が深まる
- 年配者にとっても初めてのVR体験は強い記憶として残る

実際、介護予防イベントや地域サロン、福祉センターの来館者向けミニ体験会など、様々な場面で高い集客効果と満足度が得られました。



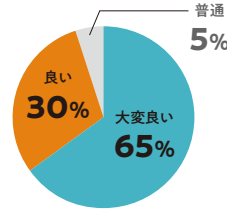
## 「家でも同じことが起きています」- VR体験後に寄せられた切実な声

VRを体験した住民の中には、

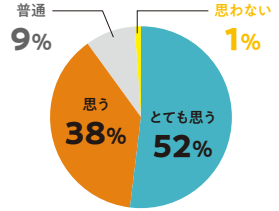
- 「うちでもこういう行動があります」
- 「まさに家族がこんな状態」
- 「病院には行きづらくて…」

と、これまで相談できなかった悩みを語り始める人も多かった。これにより、介護者や認知症が疑われる家族が“支援につながる最初の一步”を踏み出す契機にもなっている。

「認知症の方への接し方」の理解に役立ちましたか？



周囲にVR体験勧めたいですか？



〈体験者のアンケート集計よりn=97〉

## 「認知症の正しい理解を広めたい」



繰り返し強調したいのは、「**“認知症への正しい理解”が地域を動かし、孤立を防ぐ基盤になる**」ということです。偏見をなくすためには、言葉より体験が有効。小さな関心が、支援につながる行動を生みます。医療や介護は「待つ」のではなく、アウトリーチが必要。住民・行政・福祉が歩み寄る“まちづくり”が重要です。VRの導入はその大きな一歩になっていると考えています。今後も実践を積み重ね、安城市から新たな地域福祉モデルを発信していきたいと考えています。(杉浦氏)

安城市社会福祉協議会 杉浦 様

## アセスメントシート (DBD13) 活用の試み

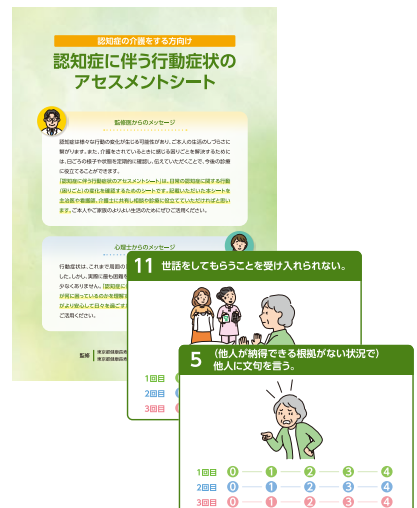
「認知症の診断前段階で悩む住民に、VRと併せて**“アセスメントシート”**を紹介し、受診や相談につなげられた事例を複数経験しています。高齢者・家族・医療をつなぐ“橋渡し役”としての機能がVR活用によってさらに強化されていると感じました」(杉浦氏)



DBD13は、介護者が記入できる認知症の「困りごと（行動症状）」を数値化し、医師・看護師・介護職との情報共有を容易にするためのツールです。厚生労働省の資料でも、認知症ケアの評価項目として採用されているスケールであり、行動症状の変化を簡便に把握できる点が特徴です。



これにより、行動症状の有無や程度、経時的な変化を確認しやすく、介護負担の軽減にも役立つとされています。今後は、FACEDUO体験の前後でアセスメントシートを継続して実施し、行動症状の改善や負担軽減につなげていく予定です。



詳しくは公式サイトにて

faceduo

検索

販売 Otsuka

開発・製造 JOLLY GOOD!

2026年4月作成  
FD2604004